

あの震災から学んだこと

1995（平成7）年1月17日、午前5時46分、私たちが今までに体験したことがない大きな地震が兵庫県南部を襲いました。

わずか20秒にも満たない揺れは、大きな災害をもたらし、6,400人を超える尊い人命や大切にしていた多くのものを私たちから奪っていきました。しかし、その一方で、私たちは、命の尊さ、助け合うことの大切さなど多くのことを学びました。

私たちは、この貴重な体験を忘れることなく、この震災から得たもの、気づかされたことを後世に語り継ぎ、人としての在り方生き方を考えていかなければなりません。

あの震災から学んだこと ～いま振り返って～

私たち家族は阪神・淡路大震災で母を亡くしたことで変わった。兄たちはいつも私のことを一番に考えてくれ、震災以前は家族のことには全く干渉しなかった父が、今では人が変わったように私たちのために、一生懸命にやってくれ、お年寄りの方のためにもボランティア活動をやっている。自分がしんどいときでも他人のことを考え、自分のことよりも他人を優先し、気を配れる。私はそんな父を尊敬している。私はそんな家族を誇りに思う。母を亡くし、心にできた大きな傷は決して消えることはないが、私には大好きな家族がいる。だから母の分まで私が生きようと思う。阪神・淡路大震災で大切な人を失った人々にとって、あの震災は忘れることができないものであり、決して二度と起こってほしくない悪夢だと思う。大切な人だけでなく、家や財産やその他にも失ったものはたくさんあると思う。あの地震が起こったときから全てが崩れたような気さえる。

けれど、あの震災で失った分、学んだものもたくさんあると思う。避難所にいるときは食糧の大切さを知った。毎日普通に食べていた食糧がなく、食べ物があることのありがたさに気づいた。仮設住宅では、コミュニティの大切さや人の優しさを知った。たくさんのお年寄りの方々と知り合ったことで父や自分自身が変わったように思う。あの震災で、人と人とのつながりの大切さや、今普通に生活ができていることが凄いいということ、家族が素晴らしく

温かいということ、そして何より命は尊く大切なものだということを知った。

阪神・淡路大震災が起こった年が“ボランティア元年”と言われるように、あのときからボランティアが盛んに行われるようになったと思う。後は、そのボランティア活動をいかに長期的に続けていくかが肝心の点だと思う。私はあの震災



(写真提供 神戸新聞社)

で“ボランティア”というものを初めて知り、容易なことではなく、継続するのが困難だということを知った。けれどボランティアというのは、いざ災害が発生したときに“助けたい”“手を差し伸べてあげたい”と思う気持ちさえあれば誰にでもできることで、特別な人がやることではないと思う。

私の場合は、仮設住宅でたくさんのお年寄りの方と知り合ったことで、父と一緒にボランティア活動を始めた。父や私がボランティアをやろうと思えるのは、おばあちゃんたちがニコニコ笑って「ありがとう。また来てね」と言ってくれるのが嬉しいからだ。

私はボランティアをやり始めたのがきっかけとなり、将来は福祉方面に進み、これからも父とボランティア活動を続けていきたいと思っている。そんなきっかけを作ってくれた父に“ありがとう”と言いたい。そして、父のような人間になりたいと思う。

母の死がなければ、父も兄もボランティア活動を始めることはなく、私も一緒にやってはいなかった。母の死からはいろいろなものをもらった。母との思い出は記憶の中にほんの少ししか残っておらず、アルバムをみてもあまり覚えていないことが多いが、毎日保育園に送り迎えをしてもらっていたことや、毎年田舎に帰っていたことだけははっきりと覚えている。母と過ごした時間はたった8年程しかないが、母には物や時間に代えられないようなものをもらった。だから私は母に“産んでくれてありがとう”と言いたい。そしてあの震災で助かった自分の命を大切に、この震災から学んだことを忘れずに伝え、環境防災科で学んだ知識を将来に生かし、人の役に立ちたいと思った。そして、あの阪神・淡路大震災から何年経っても、本当の意味での復興はこれからも続くが、この出来事を後世に伝えるためにも一歩ずつ前進していきたいと思う。

(県立舞子高等学校「語り継ぐ」より抜粋)

